
こんな魔王と勇者ってどうですか？

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな魔王と勇者ってどうですか？

【Nコード】

N2699X

【作者名】

ケセラランパセラ

【あらすじ】

俺、佐藤勇治さとうゆうじは平和な田舎町で暮らしていた平凡な高校生だった。けどあることがきっかけで異世界に飛ばされてしまいいきなり勇者になってしまった。そこで魔王退治を依頼される。しかたなくその依頼を受けて魔王退治に向かうがその魔王がかなりの変わり者だったんです。

俺、異世界に来ちゃいました(前書き)

はじめまして。ケセランパセランと申します。ファンタジーが書いてみたくて書いてみましたが！絶対グダグダになってきますのでそれともいいよという方はよろしくお願いします。！

俺、異世界に来ちゃいました

ここは日本のとある田舎町。あるものは見渡す限りの畑と田んぼ。町の周りも山に囲まれており自然があふれているとても空気のおいしい場所だ。これだけ聞けばとてもいい場所のように思うだろう。しかしさつきも言ったとおりここにあるのは見渡す限りの畑と田んぼそして山。そんな環境に俺は最近不満を感じるようになっていた。「本当なんにもねえよなこっつて」

そんな独り言を言いながら俺「佐藤 勇治」(さとう ゆうじ)は高校の図書室でただいま居残り作業中。

「はあ、あ、ついてねえよな」

よりもよって一番怖いと評判の教師の授業で居眠りしてしまうなんて。おかげで図書室の書庫の整理なんてやりたくもない仕事を任されてしまった。

「にしてもいったいいつになったら終わるんだこれ」

俺の目の前には気の遠くなる程の本の山。その中にはいつの時代の本だよと思うようなものもいくつか混ざっている。っていうかうちの高校の図書室ってこんなに本があつたのか。普段来たことがないから全然知らなかった。

けれどもここそんなに利用者がいないのか先ほどから人っ子一人来ない。本読みに来る人がいないのにこれだけ本あつてもあんまり意味がない気がするが。

そんなこと考えつつしばらく作業していると

「ん？・・・なんだこの本？」

たくさんある本の中の山の中でそれはひときわ怪しい異臭を放っていた。他の本と比べて見た目がかなりごつくこの本で思いつき殴られれば死ぬんじゃないかと思うほど分厚い。表紙にはどこの国の文字か分からないがひたすら一面になにか書いてある。なんていうかよくファンタジー映画なんかにてくる冒険の書みたいな感じの本だっ

た。

「うわぁー何かこれハリー ッターとかにでてきそうだな」

ちよつと興味を持ったので読んでみようと思ひ表紙をめくろうとしてみたが

「うおっ！なんだこれ重っ！！」

すごく重いぞこの表紙。表紙なのにこの重さつて読ませる気ないだろ。

「ぐぬぬぬぬ・・・こんぬおおおおおおお！！」

表紙をめくろうと格闘すること数分。なんとかめくすることに成功したがかなり疲れた。

「ぜえはあぜえはあ・・・い、一体何の本なんだ？」

息をきらしながら本を見てみると

「なんだこれ？なんて書いてあるんだ？」

ページ一面にまたもやどこの国のものか分からない文字がびっしり書かれている。それとどこかで見ることがあるようなこれは魔法陣つていうのか？が書かれていた。

「これ何なんだろう？」

俺はその魔法陣？のようなものに手を触れてみた。その時だった

「あれ？なんか急に眠くなってきた・・・」

頭がクラクラする。なんだか体も軽くなってきた気がする。

「あゝ・・・どうなっ・・・てん・・・zzzzz」

俺はそのまま本の上に突っ伏すような感じで倒れこんだ。なにやら本が一瞬光っていたような気もするがそんなこと考える前に俺の意識は完全にブラックアウトしていった。

それからどれくらいたったのだろうか。

「・・・さま。」

ん？なんだ？なんだか体がゆさゆさと揺さぶられているような感覚が急に襲ってきた。

「・・・者様」

それに誰かの声も聞こえてきた。誰だ？せっかく人が気持ちよく寝

てたのに。

「う・・・ん」

闇の中に消えていった意識が次第に戻ってきた。俺はゆっくりと目を開けて上半身だけを起き上がらせる。

あゝまだ起きたばかりなので頭がボクボクとする。しばらくその体勢のまま下を向いていた。すると次第に頭がスッキリしてきた。

「どれくらい寝ちまつてたんだる俺」

よっと立ち上がって周りを見回す。そこで俺は違和感を感じた。

「あれ？」

図書室ってこんなに広かったっけ？天井とか見上げるくらい高かったっけ？こんなに綺麗な絨毯とか敷いてあったっけ？

「寝ぼけてるのか？」

そう思っただけ目をゴシゴシとこする。ついでにほっぺたもつねってみた。痛い。どうやら夢ではないらしい。意識もはっきりしているし見間違えることはないだろう。

「ど、どうなってるんだ一体」

何が起きたのかさっぱり分からない。ここはどこだ？そんなこと考えてたら

「勇者様！！お目覚めになりましたか！」

「ぬお！！」

急に後ろから声をかけられた。振り返るとそこにはマンガとかでよく見るようなお姫様みたいなカツコウをした女の子が立っていた。

「も、申し訳ありません。驚かすつもりはなかったのですが」

「あ、あゝいえ大丈夫です。はい。」

え〜と、誰だこの子。

「けれど、本当に勇者様が来てくださるとは。やはりこの書に書いてあることは本当だったのをごさいますね」

ん？ちよつと待て。この女の子今なんて言った。確か勇者？とか言っただけだったか。

「あ、あの〜すいません。さっきから言ってるその勇者ってなんで

すか？あとここはどこなんでしょうか？」

「ここですか？ここはセシリエル王国でございます。そして私がこの国を救ってくださる勇者様をお呼び出しする儀式を行ったところあなた様がこの国に呼び出されたのです。つまりあなたがこの国の救世主である勇者様ということなのです！！」

「なるほどつまり俺はこのなんたら王国を救う勇者様としての国に呼び出されたというわけか。」

「あるあるryね……………よ……………」

「はあああああああああああああああああああああああ！」

「……………」

「こうして俺の勇者様としての生活が始まったのである。」

「え！？始まったちゃうの！！？ちよっと……………！！！」

一般人が魔王を倒すとか無理だと思うんだ(前書き)

お、お久しぶりで・・・ぐはっっ!!

というわけで久しぶりに更新です。よろしくおねがいし・・・バタッ。

「さあ着きましたよ勇者様」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？勇者様？きゃああああ！勇者様——！！」
しばらくして

「・・・・・・・・はっ！！！」

俺は何とか意識を取り戻した。

「勇者様！よかったですー！。ごめんなさい私慌ててて・本当に
ごめんなさい・・・」

女の子は泣きそうになりながらペコペコしてきた。

「い、いやまあ大丈夫だから。そんな泣きそうな顔しないで、ね？
実際全然大丈夫じゃなかったけど。生まれて初めて本気で死ぬか
と思った・・・」

「ぐすつ・・・本当にごめんなさい。勇者様はお優しいんですね」

「い、いやあそんな優しいなんてことは・・・」
「またもや生まれて初めて女の子に優しいなんて言われてしまった。
正面から言われるとすんげえ恥ずかしいな。」

と、ここで俺はあることに気づいた。

「そっぴや君名前は何て言うの？」

「あ！も、申し訳ございません！私の名前はカトレア・ヒューブリ
ックと申します」

カトレア・ヒューブリック？何かすごい名前だな。やっぱりここ日
本じゃないのかなあ。

「カトレア・ヒューブリックさんね。俺の名前は佐藤勇治っていい
ます」

とりあえず俺も軽い自己紹介をする。

「佐藤勇治様・・・それが勇者様の本名なのですね。しっかりと覚え
ておきます！」

「あ、ああありがとう。それよりもカトレアさんいつたいこことて・
」

俺の目の前には所々に綺麗な装飾が施されている金色の扉があった。

こういうのよく分からない俺でも見入ってしまうほどの壮大さだった。

「ここにはわが国が魔王を倒すために開発した様々な武器が保管してあります。今から勇者様には魔王討伐のための武器選びをしていただきます。」

「まただ。さつきから魔王だの討伐だのすごい話をしているが俺には何のことだかさっぱり分からない。」

「ま、待って俺が魔王を討伐？それってその魔王とやらと戦えってことだよな？」

「はい、そのとうりでございます」

「いや、あの俺ケンカもしたことないし力だってそんなにないから戦うとかそういうのは無理だと思うんだよね」

「いえ、勇者様ならきつと大丈夫です！この書にも召喚された勇者が必ずやわが国を救ってくれると書いてありますしそれにこの武器庫の中にある武器を使って挑めば問題はないはずですから！」

「いや色々と問題だらけだよ！！何なのその自信は！本人が無理だと言っててるのに！」

「とにかく見ていただければ大丈夫だと思えるはずですから！行きましょう勇者様」

「とりあえずここで魔王討伐の武器とやらを選ぶことになったのだが

「選ぶだけ無駄だと思っけどなあ・・・」

こうして俺の武器選びが始まった。

初期装備って意外と大事（前書き）

ファンタジーって書くの難しいですねえ〜・・・

初期装備って意外と大事

カトレアさんに案内されて武器庫の中に入ってみる。するとそこには「な、なんじゃこりゃ・・・」

部屋の中はおびただしい数の剣やら鎧やら俺がいた田舎町ではまず見ないであろうものがところせましと飾られていた。入り口から眺めただけでは奥のほうに何があるか分からないほど部屋もかなり広い。

「すげえ〜どんだけ武器の種類あるんだよ。ってかこの中から選ぶの？」

「はい。魔王討伐のためにはこれくらいしなないとイケませんから」
「気合入ってんなー。ここまでしないとイケないくらいすごい魔王って一体どんなんだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
あ、だめだ想像しただけで俺の中の危険を知らせるアラームが大音量で鳴り響いてる。

「さあ勇者様好きな武器を選んでください」

「は、はあ〜」

好きな武器を選んでくださいと言われましてもどうすればいいんだよ。こんなの使ったことも無いのに。とりあえず部屋全体を見るために奥の方へと進んでいく。途中どうやって使うかも分からないような武器がたくさんあったのでカトレアさんに説明してもらったがどれもこれも俺が使いこなせそうなものではなかった。

というか本音を言えば武器なんか使いたくなかった。俺は平和主義派なので魔王と戦うなんてもってのほかだし。話し合いとかで何とかならんもんかなあー。

そんなこと考えながらしばらく部屋の中を見てまわったがどれもこれもしっくりくるものが無かった。

「勇者様お気に召したものはありましたか？」

「うーん・・もう少し見てまわってもいいかな？」

「ええ好きだけ見てください。あ、ちなみに私のおすすめはこの龍殺しの剣かこちらの10tハンマーでございますわ」

「ぜつつつつつつつたいたい嫌だ!!!なにそれ!どちらもありえないほどの禍々しいオーラがにじみ出てるんですけど!!」

「遠慮しとくよ・・ははは・・」

「まずいぞこれは早くていい感じの武器を見つけないととんでもないやつを使う羽目になるかもしれん。それだけは絶対に避けなければ。そしてまたしばらく部屋をきよろきよろしている」と

「あれ?なんだあの箱?」

「さっきは気づかなかつたけど他の武器の陰に隠れるようにしてポツンと少し大きめの箱が置いてあった。」

「カトレアさんあの箱はなんですか?」

「ああ、あれは武器開発をしている時に試作品として作ったのが出来がよくないからという理由で駄目になったものを入れているものですね」

「試作品か。一体どんなんだろう?とりあえず箱を開けてみる。そこで俺は思わず自分の目を疑った。」

「こ、これはまさか!!!」

「そこにあつたのは叩くと可愛い音のする真っ赤な格好をしたあいつだった。そうそれは」

「ピコピコハンマー!!!」

「つてなんでだよ!!!!!!なぜピコピコハンマーがここに!やる気あるのか武器開発者!」

「そのハンマーは叩いてもやわらかいためあまり攻撃の威力がなくて叩く時にピコツという音がするだけの失敗作ですわ」

「まあ魔王相手にピコピコハンマーは確かにないよなあ。むしろ魔王に馬鹿にしているのかと思われて怒りをかいそうだし。これは無理があるか・・」

「そう思っていたがここで俺はふとある名案を思いついた。」

「そうか。そうだ！この手があつたか！！」

これならば平和的解決ができるかもしれない。うん、いける！！俺は決心した。

「カトレアさん俺この武器にします！この武器で魔王を倒して見せます！！」

「え！こ、これでよろしいのですか？ですがこれは失敗作ですよ？」

「大丈夫です俺に任せてください！絶対に大丈夫ですから！だからおねがいます！！」

俺がそう言つとカトレアさんは少し何か考えはじめた。

頼む、頼むから龍殺しとか10tとかはやめてくれー！ー！。

そんな俺の願いが届いたのかカトレアさんはしばらく考え込んだ後「わかりました。勇者様がそこまでおっしゃるのならお任せいたしますわ」

よっしやあああああああああー！！！！

「ありがとうございます！！」

こうして俺は魔王討伐のためにピコピコハンマーを装備していくことになった。

うん、まあなんとかなるだろう。……たぶん。

魔王城って意外と分かりやすい(前書き)

魔王ってどうやって生まれるんですかね?というところでいい疑問が浮かびました。本当にどうでもいいですね。
相変わらずグダグダですがよろしくお願いします。

魔王城って意外と分かりやすい

「それでは勇者様とりあえず武器も決まったわけですしさっそく魔王討伐に向かっていただけですか？」

「え！？もうですか！？！っていかちよつと待って、その魔王っていうのはなんなの？なんでそんなことになってるの？」

「それは・・・話せば長くなるのですが・・・」
カトレアさんが急に真面目な顔になりなにやら深刻そうなオーラをだしている。

「じつは、ここ最近魔族による事件や暴動が頻繁に行われるようになって近隣の国や村が大きな被害をこうむっているのです。中にはもうすでに壊滅状態にまで追い込まれている場所もあるようでもはやこれは見過ごすわけにはいかないということのでわが国は魔王討伐のために動き出したのです」

「壊滅状態って・・・そんなひどいことになってるのかよ」
確かにそれは見過ごせないよな。

「ん？でも、ここ最近ってことは前まではそんなことなかったってこと？」

「はい。数年前まではこういった大きな事件や被害も無かったのですが急に魔族の活動が活発になってきて今ではこの有様です」

急に活発にか・・・どうしてだろう？何か理由があるはずなのだろうけど。

「うーん、さっぱりわからん」

「とにかく今この現状をどうにかしなければいずれわが国も何らかの被害をこうむる筈。そうなる前に元凶をどうにかしなければいけないのです！！」

「な、なるほど現状はわかった。けれどもさ俺に魔王討伐とかは無理だと思っただよな。ほら俺、体格も平凡だし力もそんなに無いしさ」

ほどよりも淀んだ空気と時々聞こえる何かの鳴き声に俺のメンタルポイントがゴリゴリ削られていった。

しばらくして一つの部屋にたどり着いた。部屋の扉には死神を彷彿とさせるようなデザインの装飾が施されていた。

「開けたくねえ・・・開けたくねえよ・・・」

泣き出しそうになりながらも恐る恐る扉に手をかける。その時

「あの～私の部屋に何か御用ですか？」

「うびゃあああああああああああああ!!」

突然後ろから声をかけられた。俺は叫び声を上げながら慌てて後ろを振り返った。

すると、そこにいたのは・・・

異種族ってなんかいいよね(前書き)

グダグダですがよろしくです。(泣)

異種族ってなんかいいよね

そこにいたのは目のやりばに困ってしまいうくらいナイスボディをしたお姉さんだった。肌の色は茶色くこれは褐色肌というんだろうか？瞳の色は綺麗な赤色で、髪の色はピンク色に染まっていて何だか少し色っぽい感じがした。

しかし、そんなことよりもまず俺の目に付いたのは彼女の背中に生えている

「は、羽？」

しかも、ただの羽ではない。何かの映画で見たことあるような立派な悪魔の羽が生えていた。

それを見た瞬間俺は悟った。この人は人間じゃない！！俺の中の危険を知らせるアラームが大音量で鳴り響いてる！！

「す、すいませんでしたああああああ！！」

とりあえず土下座した。

「ど、どうしたんですか！？大丈夫ですか？」

彼女が俺に手を伸ばそうとした

「ひいひいひい！！？お、お願いです殺さないでええええ！！」

「えええ！！？」

俺はひたすら土下座した。嫌だ！こんなところで死にたくねえ！！

「ちょ、ちよつと大丈夫ですよ。そんなことしませんって」

彼女が慌てたような声で俺にそう言ってきた。

「ほ、本当に？」

「本当ですよ！！だから落ち着いてください」

彼女は軽く微笑みながら優しい声で俺をなだめようとした。少しして

「落ち着きました？」

「は、はい」

あの後、俺は彼女に部屋に案内されてなぜかお茶をご馳走になって

いた。

しかし、この部屋あのおぞましい扉の見た目とは裏腹に中に入るととても可愛らしいまさに女の子って感じの部屋だった。アンバランスすぎるだろ・・・

「あの〜ところであなたは？」

「は、はい！私怪しいものではありません！」

「？」

「お、俺の名前は佐藤勇治っていいいます」

「佐藤勇治さんというのですね。私はテスト・スキンスといいます。種族はサキユバスです」

彼女はにっこり笑いながら自己紹介をしてくれた。

「サキユバス？」

何かで聞いたことがある。確かサキユバスって男性の精気とかを吸い取るとか何とかっていう悪魔？だったっけ？

「はい。あ、でも心配しないでください。私は人間を無理矢理襲ったりしませんから」

「は、はあ・・・」

それを聞いて少しは安心したがそれでも油断はできない。なんとってここは魔王城の中なのだから。

何が起るかは分からない。

「そ、その羽もサキユバスのものなんですか？」

俺はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「ええ、そうですね。あ、少し怖いですよね。ちょっと待ってください」

そう言っただけで彼女は何かつぶやいた。すると次の瞬間、羽が徐々にテストさんの背中えと消えていった。

「す、すげえ・・・」

その光景に思わず見入ってしまう。一体どうなってるんだらう？しばらくするとテストさんの羽は完全に消えてしまった。

「これならもう怖くないですよね？」

「あ、あはははは・・・」

俺は苦笑いしかできなかった。

「ところで、佐藤さんは人間ですよ？こんなところに何か御用でもあつたんですか？」

「え、いやその・・・」

言えない。魔王を退治しに来ましたなんて言えない。絶対やばいことになる。

「ちょ、ちょっと立ち寄ってみたというか面白そうだったから入ってみたというか・・・」

「そうなんですか？」

「ま、まあ・・・あはは」

「うーんでもここあんまり面白いものなんてありませんよ。ここよりも城下町の市場のほうが全然面白いですよ」

「へ、へえー。そ、そうですか」

「なんなら今からご案内しましょうか？」

「い、いやそれはまた今度でいいかな・・・」

「そうですか・・・」

テストさんは少し残念そうにしていた。案内してくれようとするなんて案外いい人？なのかもな。

「それじゃあ、このお城の中を案内しましょうか？」

「あ、あの」

「はい？」

俺は勇気をだして言うてみることにした。

「案内もいいんですが俺実は魔王様に少し用があつて・・・」

「・・・え！？魔王さまに!？」

あれ？テストさん？何で驚いてるの？

「魔王様に用つていっただいどんな？」

テストさんが少し険しい顔で聞いてきた。やっぱりやばかったのかも。

どうしよう・・・嫌な予感がしてきた。

「あ、いやそのどんな人なのかなあーと思つて。少しお話でもできたらなあーと……」

「魔王様と!?!」

「テストさん何でそんなに大声出すの!?! やばい、怒ってるのかも……で、でも俺みたいなのが魔王様と話したいなんて図々しいですよ。ね。いや、ホントすいませんでしたああああ!?!」

本日二度目の土下座。

「魔王様と人間がお話?……まさか佐藤さん」

え?なにこの空気。俺まじいこと言つたのかも……

「佐藤さん……」

「ひゃ、ひゃい」

呼ばれて顔を上げると……あれ?テストさんなんでまた羽が戻つてるの?何そのゴゴゴゴゴ……つていうオーラ!?!

「人間が魔王様と……人間が魔王様と……まさか……まさか……」

「ひいひいひい!?!ごめんなさい!?!ごめんなさい!?!ごめんなさい!?!」
俺はひたすら謝つた。もしかして俺がしようとしていることがばれたのか!?!

ふいにテストさんが俺の肩をガシツと掴んだ。かなり力強く掴まれ無理矢理立たされた。

「うわあああああ!?!」

「佐藤さん!?!ぜひ魔王様とお話してあげてください!?!」

「やだー!?!こんなところで死にた……」

……

「い、今なんて?」

「ですから、ぜひ魔王様とお話してあげてください!?!きっと喜びますよ!?!」

な、なんだこの展開。何で俺と話して魔王が喜ぶんだ?

「あ……」

「そついうことなら早く言ってくればよかったのに!?!それじゃあすぐに行きましょう」

「ど、どこに?」

「決まってるじゃないですか、魔王様のお部屋にですよ!」

「え!?!いきなりですか!?!で、でもまだ心の準備が・・・」

「さあ、行きますよ」

そう言つてテストさんは俺の手をギュツと握る。そして大きな羽を勢いよく広げると・・・

「あれ?なんかこれ嫌なよか・・・」

俺の予感は的中した。テストさんが羽をはばたかせいきなり空中に浮かびだした。当然俺も手を握られているので空中に浮かぶことになった。

「ちよつ!?!うわあああああああああああ!?!」

「しつかり掴まつててくださいね!?!」

部屋の扉を思い切り開け放つて部屋の外に出るとそのまま低空飛行をして長い廊下を進んでいく。

「なああああああああ!?!た!?!す!?!け!?!て!?!
!?!!?!」

「大丈夫ですよ、すぐに着きますから」

テストさんはそんな俺を見ながらクスクス笑っている。

しばらく進むと今度は螺旋階段のある場所に出た。かなり上まで続いているようで見上げてみても階段の終わりが見えなかった。

「さあこの先に魔王様のお部屋がありますよ」

「え!?!こ、これを上るんですか・・・」

絶対に無理なんですけど・・・

「大丈夫ですよ、私が連れて行つてあげますから!」

「え、連れて行くつてまさか・・・」

「はい」

ガシツと手を握られる。そして・・・

「じゃあ、行きますよ!?!くれぐれも落ちないでくださいね?」

「ですよね!?!!?!!?!あああああああああああああ
あああああああ!?!」

俺の体は大きく宙に舞いそのまま螺旋階段の中を飛びぬけていく。

「もう嫌だあああああああああああ！！！！」

「もう少しですよ、頑張ってください」

俺、魔王の部屋にいたら結婚するんだ・・・そう胸に誓った。

そして魔王とご対面（前書き）

久々に更新です。よろしくお願いします。

そして魔王とご対面

「さあ、つきましたよ」

テストさんと空を飛ぶこと数分。何とか魔王の部屋とやらについた。

「や、やつとですか・・・おえっぷ」

き、気持ち悪い・・・もういやだ、心が折れそうだよ。

「さあ、行きますよ佐藤さん」

そう言つてテストさんが俺の手を掴んできた。

「は、はい・・・うっぷ」

何とか立ち上がりあたりを見回してみた。目の前にはとてつもなく大きな扉があり取っ手の部分だけでも軽く俺の頭を超えるくらいの大ささだ。

「こ、この扉開くんですか？」

「ええ、もちろん」

テストさんは扉に近づくと両手で扉を押し始めた。

「よいしょっ・・・と!!」

すると扉がギギギギギ・・・と鈍い音をたてながら徐々に開き始めた。

「す、すげえ・・・」

俺は呆然としながらその光景をみていた。しばらくしてテストさんが完全に扉を開ききつた。

「ふう・・・さてと、魔王様ー！ーいらっしやいますかー！ー？」

部屋の中に入りながらテストさんが大きな声で魔王のことを呼んでいた。

俺もその後が続くように部屋の中に入って見たがとにかく広い。床には真紅色の絨毯が敷き詰められている。天井にもバカみたいにかいシャンデリアやら綺麗なステンドグラスやらとにかく豪華そんなものが敷き詰められている。さすが魔王の部屋って感じだな。

「魔王様ー！テストですよー！出てきてくださーい」

俺が部屋の中をキョロキョロしている間もテストさんはひたすら魔王のことを呼び続けていた。

「テストさん魔王様いないんですか？」

「いや、この時間ならお部屋にいるはずなんですけど。おかしいなあ」

二人してあたりを見回してみる。正直俺は魔王に会わなくていいのならそれのほうがいいんだけど。

そんなこと思っていたときふとあるものが目についた。部屋の奥のほうに大きな椅子があったのだ。なんとも敵かなオーラを放っているのただの椅子ではないだろう。

「うわあー・・・なんか雰囲気あるなー」

「ああ、それは魔王様がいつも座っている椅子ですよ」
「やっぱりな。そんな感じがひしひしと伝わってくるもんな。」

俺は椅子に近づいてみた。見れば見るほどでかいし立派だ。こんな椅子に座ってる魔王と今から会おうとしているのだと思うと俺は嫌な予感しかしなかった。

そんなときだった。

「ん？なんだ？」

椅子の裏のほうで何かが動いた気がした。俺は気になって椅子の裏側に回ってみた。しかし何もいない。気のせいだったか？

「魔王様！！そこにいたんですね」

すると今度は椅子の向こう側でテストさんがそう言っていた。

「え！？魔王いたんですか！？」

椅子の裏側から恐る恐る顔をだしてみると

「て、テストさんあのお方はただただだ、誰ですか？」

「魔王様落ち着いてください。大丈夫ですよ彼はあなたに会いに来てくれたんですから」

「わ、私に！？あ、あああああの方は人間の方なですよね？」

「ええ、そうですよ。よかったですね魔王様！！」

そこにいたのはテストさんの背中に隠れるようにしてこちらを見て

ヒロインよりも敵のボスキャラの方が可愛いことってあるよね(前書き)

久々の更新です。何とかやっています。

ヒロインよりも敵のボスキャラの方が可愛いことってあるよね

えーと・・・なんだこの状況は。なんで俺は魔王と向き合ってるブルに座ってるんだ。

しかも、目の前には料理が並べられていてチキンやらビーフやら他にも色々とにかく豪華そうなものが美味しそう匂いを放っていた。

「さあ、遠慮なさらずにどんどん食べてくださいね。あ、お口に合えばですけど・・・」

相変らず魔王は顔を赤くしてもじもじしている。

「あ、ありがとうございます」

とはいってもどうしようか・・・とりあえず食べてみるか？でも魔王から出された食事って怪しいよなー・・・
もしかしたら、毒とか入ってるかもしれないし。

そんな考えがあったせいで俺はなかなか料理に手がだせなかった。

そんな時ふと向かい側から視線を感じた。その方向を見ると魔王が俺のことをじつと見つめていた。

一瞬視線が合う。それに気づいた魔王はすぐに視線をそらしてしまった。

そして、より顔を赤くしたもじもじでした。

か、可愛い・・・はっ！いやいやいやよく考える自分。相手は魔王だぞ。

そうだよ、俺はここに魔王討伐にきたんだぞ。こんな料理なんてこ馳走してもらっている場合じゃない。

「あ、あのー！」

「ひゃ、ひゃい！」

突然俺が話しかけたからびっくりしたのか魔王は椅子から少し飛び跳ねるようにして返事をした。

・・・本当に魔王なんだよなこの人。

「ほ、ほんとうですか？」

「ええ、俺は争いは好まないタイプなんで」

それを聞いて少し安心したのか魔王の表情が若干和らいだように見えた。

「とは言ったものの、俺はあなたを倒さなきゃいけない。そこで・

」

「そ、そこで？」

「ちよつとゲームをします」

「げ、ゲーム？」

魔王は頭の上から？マークをだしていた。

「そうです。そしてそのゲームとは……」

俺はお城の武器庫で武器を選んだ時に考えていた作戦を実行することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2699x/>

こんな魔王と勇者ってどうですか？

2012年1月6日07時47分発行